

「九」 有縁社会への奉仕活動

「お蔭さま・お互いさま」の社会

数年前から「無縁社会」という残念な言葉が広まっている。しかしながら、自然に包まれている人間社会では、すべて何かの「お蔭」を蒙り、「お互い」に何かと助けあっているからこそ、共生できるのである。

こんな当然の常識を私に早くから教えてくれたのが、いつも「お蔭さま」と感謝し、誰にも「お互いさま」と親切にしてきた母の姿である。その母が、「うちは母子家庭で他所さまの世話になってきたから、お前ができることで、「お返し」をしてくれ」とよく言った。そこで私は、どのような仕事でも都合のつく限り引き受けるように心懸けてきた（柄にもなく時々テレビなどに出演を求められると、断り切れず恥をかいているのも、そのためである）。

また郷里に帰ると、伝統的な冠婚葬祭などの親戚・近所づき合い（大半は家内任せ）と共に、野中地区の青年グループ「しんし会」（紳士・親子・神仕の会）を応援したり、揖斐出身の崎門学者「広木忠信に学ぶ会」を主催したり、揖斐川町教育委員会の手伝いなども続けている。

皇居勤勞奉仕と警大・皇警校への出講

勤勞奉仕といえば、年輩の方々なら戦時中の勤勞動員を連想されるかもしれない。しかし、動員ではなく純粹に自發的なボランティアとして戦後六十数年、ずっと続けられているのが「皇居勤勞奉仕」である。

これは昭和二十年（1945）十二月、宮城県栗原郡（現在市）の青年団有志が、五月の東京大空襲で皇居の明治宮殿なども焼失したと伝え聞き、その片づけを願ひ出て、瓦礫処理などを奉仕したことに始まる。

それを郷里の先輩から伝え聞いた私は、昭和四十八年十二月に皇學館大学、また同五十八年十二月に京都産業大学の有志学生を率いて奉仕した。平日の四日間、皇居と東宮周辺の草取りなどをする合間に、天皇・皇后両陛下と皇太子・同妃両殿下からお言葉を賜わる。これが受け継がれ、皇大では毎年、産大でも数年おきに、学生の奉仕が続けられている。

この勤勞奉仕が一つの縁となり、皇宮護衛官を志して就職した皇大生・産大生も少なくない。また私自身、皇居内にある皇宮警察学校で教養過程（歴史）の特任講師を頼まれ、数年務めたことがある。

さらに、それより前、文部省在任の最終年（昭和55年）から警察大学校へ週一回出講し、それを京都転勤後も平成四年までの十二年間、月一回集中講義の形で務めた。その機会に志気の高い人々と出会い、何名かのOBと今も親交が続いている。

霊山顕彰会・護王神社・靖国神社

昭和四十三年（1968）は明治元年から満百年の節目に当り、様々の奉祝事業が行われた。その中で私が少し関与したのは、幕末維新の志士たちを祀る京都東山の霊山墓苑りょうぜんを整備して、その実績を顕彰し維新の精神を継承するため、松下幸之助氏・塚本幸一氏らの支援で作られた「霊山顕彰会」および「日本を創る青年会議」の手伝いをしたことである。

このうち、後者はやがて「松下政経塾」などへと発展したから、私は直接関係しなくなった。ただ、前者については、司馬遼太郎氏が注目した「美濃浪人」所郁太郎（1838〜65）の縁で、霊山歴史館の運営委員（岩倉具忠とみたけ氏など数名）と岐阜県支部の顧問を務めている。

一方、京都御所の西脇にある護王神社ごおうは、和氣清麻呂と同姉の広虫を祀る明治以来の別格官幣社である。その祭神伝と同社史を引き受け、和氣氏の学問所「弘文院こうぶんいん」を現代に受け継ぐため企画された弘文院セミナーの月例講話を、同僚の若井勲夫教授らと手伝っている。

さらに、幕末以降の国事殉難者、戦歿英霊を祀る靖国神社も、長らく別格官幣社であったが、戦後GHQの強制により一宗教法人とされた。そこで、同社に崇敬者総代が十名置かれ、運営にあたっている。私も戦歿遺児の一人として、平成十年度から井内慶次郎（元文部次官・東京国立博物館長）の勇退後に総代（および同奉賛会の役員）を務めている。

日本学協会・関西師友会・国民会館

私が学生のころから最も学恩を蒙ってきたのは、日本学協会に他ならない。これは、昭和二十七年（1952）の講和独立直後、平泉澄博士を中心^{きんせ}に作られた文部省所管の財団法人であり、年数回の研修会や教養誌『日本』と学術誌『藝林』の発行などを行っている。

そのうち、私は夏季の鍛錬会に可能な限り参加し、また皇學館大学在職中『日本』（月刊）の編輯などを手伝ってきた。さらに平成元年から同会の理事と『藝林』（季刊、のち年二回刊）編集長、同十八年から藝林会代表を務めている。

一方、昭和二十四年に安岡正篤^{まさひろ}氏の設立された全国師友協会のうち、今なお着実に活動中の関西師友会とも次第に縁が深くなった。最近は神戸の木鶏^{もつけい}クラブ（仁出川清司氏）や、和歌山の「大切なことを学ぶ会」（向井征氏）なども少し手伝っている。

さらに、岐阜県出身の武藤山治氏（1867〜1934）が戦前に設立された大阪の國民会館では、戦後の教育正常化を進めた新教育懇話会や日本学生協議会の事務局も預かっていた。そのために、私は学生時代から田中卓・市村真一・勝田吉太郎・高坂正堯^{まさたか}各教授などの講演会や研修会などに参加してきた。そんな縁により、平成十八年から同館（公益社団法人）の理事を頼まれ、その公開講座なども時々手伝っている。

モラロジー研究所と麗澤大学の客員

縁^{えんじ}とは不思議なものながら、それを特に感ずるのはモラロジー研究所との御縁である。同研究所は、広池千九郎博士（1866〜1983）が大正末年（昭和元年）ころから提唱された「道德科学」（モラロジー）を研究し普及・実践する文部科学省所管の公益財団法人である。この広池博士は、明治四十年（1907）から神宮皇學館の教授を務めておられた（神道史と法制史の担当）。その教え子の高原美忠^{よしただ}先生（八坂神社宮司）は、私が皇學館大学へ赴任した当初の学長であり、その恩師広池教授の思い出をよく話された。

また、私の文部省在職中、近世史専門の教科書調査官として来任されたのが、モラロジー研究所研究員兼麗澤大学助教授の美和信夫氏（岐阜県出身、名大の四年先輩）である。

さらに、十年ほど前から私共の京都産業大学で開く日本文化研究所の月例会などに参加し、『皇室事典』（平成21年、角川学芸出版）の編纂も献身的に手伝ってくれたのが、モラロジー研究所広池千九郎記念館主任の橋本富太郎氏である。

しかも、広池幹堂現理事長からのご依頼で、最近二つの役目を引き受けた。その一つは、同研究所の道德科学研究センター客員教授、もう一つは、麗澤大学の比較文明文化研究センター客員教授である。共に非常勤ながら、研究会や国際会議などで内外の碩学たちと学問的交流のできることは、まことにありがたい。

（追記）後述（あとがき）のとおり、私は今春から道德科学研究センターの教授（研究主幹）

として、皇室伝統の史的研究に主力を尽くす。